2Aa-12　近代日本におけるガス・電気を熱源とする調理器具の価格変動に関する調査研究　－家庭調理の変容過程との関連において－

○柏木麻由美　平井　聖　（昭和女大・院）

〔目的〕近代社会において台所熱源としてのガス・電気及びそれらを主力とする施設・設備が普及していく過程について、その実態と史的意義を明らかにすることを目的とする。これまで、ガス、電力の台所熱源への進出に伴い、新しい加熱器具、被加熱器具の導入、さらには、食生活の変容が、それぞれどのような関わりをもって日本の都市社会の家庭に浸透していったかについて、調査を行ってきた。今回は、薪炭費、ガス代、電気代の変化及びそれらを熱源とする調理器具の価格の変動に関する調査を行い、普及の様態について考察を試みた。

〔方法〕明治、大正、昭和15年以前の単行図書、婦人雑誌、家事教科書、新聞、ガス会社、電力会社等のカタログを主な資料とし、それらの中から、台所の熱源、加熱器具、被加熱器具等の価格に関する記事を取り出し、検討を加えた。

〔結果〕日本の近代社会における薪炭等よりガス・電気への熱源の交替は、加熱器具、被加熱器具に大きな影響を与えた。明治40年以降の家事教科書では、加熱器具の種類も増え、ガス竈、ガスコンロ、料理用ストーブ、石油竈、コークス竈が紹介され、それと同時に天火焼器、ソース鍋、フライ鍋、スープ鍋、シチュー鍋等の西洋器具の使用を勧めるものが多くなっている。そして大正末には、電気竈も登場し、それと前後してアルミニューム製の鍋、釜が頻繁に出てくる。これらは、発売当初、高額であったが、少しずつではあるが低廉化の傾向を示した。そのことによって、この種の器具の普及が促進され、食文化史の上で重要な意義を持つものであることが判明した。